

レースっていいよね  
第24回 ～旅情編～

## 「ゴー、ウエスト！ ヨーロッパ激烈2週間」の巻

### 其の参

パルマから高速道路A1号線を南下、今日の目的地は御存知モデナとマラネロである。クルマ好きならすぐにピンと来る。そうマラネロと言えば、かのフェラーリの本社があり、近所のフィオラノには専用テストコースもある。オフシーズンのエフワンのテストなんかもここでやる。私はそれほどフェラーリ好きではないが、折角イタリアに着たのだし、何と言っても通り道。立ち寄らずにはいられまい。

ちなみに、パルマからこのA1を南へ10分も走ると、世界最大のパスタメーカー「バリラ」社のやたらとデカイ工場が道沿いに見える。このバリラ社こそ、かつて日本で走っていたレーシングドライバー、パオロ・バリラの会社である。

余談だった。さて、モデナまでは約30分という所だろうか。勿論、この時の時速は150～170キロであることは言うまでも無い。この高速道路はつくづく気持ちの良い道路だと思う。

ところで、フェラーリを見るといっても、まさか本社を見に行くわけではない。目的はフェラーリ博物館にある。本社から徒歩で5分ほどの所にあるのだが、博物館好きな私としては是非押さえておきたかったのだ。ちなみに、本社を見てみたいというミーハーな気持ちも無かったとは言えないが・・・。



モデナに宿を取り、荷物を置いてマラネロを目指す。田舎道を飛ばして(もう既に地元民より激しい運転

である。しかし、気を付けなければならないのは、たまに警察がネズミ取りをしていることだ。)

そのフェラーリ博物館。随分近代的な造りで、中には往年の量産車からレースマシンに至るまで、そして各種プレミアグッズなどが展示されている。当然全てお触り厳禁だけど、そんなのお構いなしで皆ベタベタ触ったり、挙句の果てにはポンツーンに座って写真を撮るイタリア人を目撃すると、「さすが」と言わざるを得ない。

展示物の中には近年飛躍的な発展を遂げたCFRP技術を垣間見ることの出来る製品も少なくない。一人のレース屋としては大変興味深いものが数多くあったと思う。(その割の入場料は超安い。確か一万リラ、600円程度だと思う)

ホテルに帰って近所の中華料理屋に入る。とにかくイタリアの中華は安い！ パルマでもそうだったが、ここモデナでもたらふく食って、喉から溢れんばかりのオーダーをしても2万リラちょい。日本円にして1200円くらい。

ちなみに、私は世界中何処へ行っても必ず一度は中華に行く。「せっかくヨーロッパに来てるのに」とのご指摘もあるだろうが、一度是非食べてみて頂きたい。各国、地域によって同じ中華とはいえ、かなり特徴があるからだ。

例えば、今回パルマの中華では「マッシュルームとアスパラ炒め」があった。注文の時、てっきりグリーンアスパラのことだと思っていたが、出てきたのはホワイトアスパラ。一瞬、「え？」と固まったが、食すとこれが絶妙で美味い。洋風な味付けで食べることの多いホワイトアスパラだが、こういう食べ方もあったかと気付かされる。

ちなみに、アメリカの中華では炒め物の類にセロリが入っていることが多かった。セロリは癖があり人によっては好き嫌いの多い野菜の一つだが、これもまた美味しいのである。独特の歯応えを残しつつ、臭味は見事に消している。

このような、その地独特の特徴を生かした材料の選択、またイレギュラーな食材までも見事に調和させてしまう調理人と中華料理の奥深さをきくと堪能できるはずである。ま、つまり安くてボリュームがあって、醤油系の味付けが恋しくなったときは心強い味方になるということだ。

翌日。モデナからA1号線を更に南下、目的地はボローニャだ。今日、明日の2日間で最後のイタリア滞在日となっている。渡伊直後からずっとレース関係で動き回っていたので、このボローニャ滞在は完全なオフ。だからあえて宿は街中ではなく、街から少し離れた、小高い山間に囲まれた所を探した。

これが大当たり。またしても最強運の男パワー炸裂、こんなに運を使い果たして良いのか？というほど素晴らしいロケーションである。そしてまた、山間を抜ける道路がいわゆるワインディングロード、そして私には今や自分の分身のように言うことを聞くルノー・クリオがある。ってことは「この峠を攻めずにいるものか」と、つまりこういう事である。

このクリオは凄い。1.2リッターらしいが、シフトさえ気を使えば気持ちよく前へ進む。そしてやはり、後輪の素晴らしいグリップ。この辺は私の「AX」にも共通することではあるが流石はフランス車、これほどキビキビと、気持ちの良い走りは恐らく他国の追随は許すまい。



ともかくにも、写真を見て頂きたい。写真では一部分しか分らないが、実際にはこの風景が360度存在しているのである。この絶景を前に、美しい文化財、美味しいメシ、素晴らしい景色、余りにも多くの「美」を独占するイタリアというこの国を少し、いやかなり羨ましく思うのである。

ところで、この宿には一組の日本人夫婦と一人のイギリス人が宿泊していた。会った尻から話が盛り上がり、結局その日一緒に夕食を取り、夜更けまでゲームに、酒にと大盛り上がりだった。こうして旅先で知り合いが出来るというのは本当に素敵なことだなあとつくづく実感。  
あ、このイギリス人ジェイソンと言うのだが、どういう訳か気が合ってしまい、この滞在中ほとんど四六時中を共に過ごす羽目になる。

更に翌日、ミラノに旅立つ夫婦を街まで送り、ジェイソンの奴がやたらプリーズを連発する。話を聞くと、無茶苦茶サッカーフリークで(イギリス人いわく、サッカーはアメリカの呼び方で正式にはフットボールと呼ぶべきだ・・・らしい)、イタリア各地のサッカー競技場を見て周っているのだと言う。で、あとパルマ、モデナ、レッジョ・エミリア、ボローニャへ行きたいと言う。つまり、私に足になって欲しいと言うのだ。「コノヤロー、俺はパルマからモデナを周ってやっと帰ってきたんだぞ！」と言うと、「もう一回どう？」だって。  
しかも、すごい懇願する目で見ると・・・。「分ったよ、その代わりガス代と高速代はお前持ちだかな！！」と言うと、「勿論！」と快諾。

実際、私自身ボローニャの街は既にあちこち見て周ってしまったし、もう一度アウトストラダを爆走してみたい、そしてちゃんとリアナに「さよなら」を言いたい。という願望があったので、まさに利害一致。それに、御殿場・京都間を一日で往復するのに慣れている私にとって、この距離的はさほど遠い訳ではないし。  
そのジェイソン、各地のサッカー場を見て周り、その興奮度たるやイギリス人のサッカー熱を知るには十分なものであった。人間、熱くなれるものがあるというのはホントに幸せなことである。



その日の夕食を二人で食べながら、何度も感謝の言葉を言い、そして「ポンドは強いからね」と言ってこの日の食事代、全部面倒見てくれたジェイソンはどうやらホントに感謝感激してるらしい。お互いまるでさも古い友人のようにジョーク(かなりブラック系)を言い合い、イギリス人と日本人という垣根を越えて友人として付き合えたこの時間はホントに、本当に素晴らしいと思う。

ボローニャからパリへ出発する朝、イギリスの伝統的な別れ方(要は抱擁である)を交わし、再びEメールで会おうとの約束をして、しばし寂しさも感じつつ、いざクルマはボローニャ空港へ。今日の夕方にはパリ着だ。いよいよこの旅も後半に差し掛かろうとしている。



ボローニャのとある教会にて結婚式の最中  
両人が壁に手をあて、祈りを捧げることで誓いとするらしい



ボローニャ、ドオーモ前にて白バイ兄ちゃん  
ドゥカッティよ、これ！M900だと思う。カッコイイっしょ！！



左がボローニャのサッカー場、右はパルマのもの。さすがに本場はデカイ！